

〔研究報告〕

コロナ禍における基礎看護学実習Ⅱに関する検討 ～実習形態の違いによる自己効力感に関する考察～

篠原幸恵, 中島紀子, 高田律美, 三並めぐる, 大坪かなえ

人間環境大学松山看護学部

【要旨】

【目的】本研究は、コロナ禍で実施した基礎看護学実習Ⅱが、学生にとってどのような学びが得られたのか、実習目標の達成度と自己効力感の実態について明らかにする。【方法】対象は、研究同意が得られた2年生57名である。調査内容は、臨地実習受け入れへの不安の有無、実習目標の達成度、臨地実習自己効力感とした。【結果】本研究は、コロナ禍における実習形態は多様であったが、病院実習では直接、患者を受け持ち実際に援助したことで、実習目標を達成することができ、自己の課題も見出していた。学内実習では模擬指導者役のもと、教職員による模擬患者に対し、直接、援助を実施したことで、実習目標を達成することができていたが、リアリティある患者の反応までにはいたらなかった点が課題として残った。【考察】コロナ禍において行われる様々な実習形態に合わせて、実習指導者と共に連携し、学生の自己効力感を高める支援が重要であることが示唆された。

キーワード：看護学生、COVID-19、基礎看護学実習Ⅱ、臨地実習自己効力感、実習形態

I. 諸言

2020年、新型コロナウイルス感染拡大により、医療現場では、通常の診療体制の維持すら困難な危機的状況を迎え、病院における看護学科の学生（以下、学生と略）の実習は、臨地の場もしくは実践の場で実施することが困難となった。本学部も、2020年8月の基礎看護学実習Ⅰを学内実習に切り替え、今回の基礎看護学実習Ⅱの病院実習も学内実習に切り替えざる得なくなり、教員は、学内で模擬カルテの情報をもとにした患者役や、指導者役を演じることになった。

このような実習形態において、学生はどのような学びを得たのか、病院実習と学内実習それぞれの学びの違いは何かを明らかにするために、形態の異なる実習を経験した学生を対象に、調査をした。また、本研究では、学生の自己効力感に着目し、眞鍋らの作成した臨地実習自己効力感尺度（2007）を用いて、病院実習を経験した学生と、学内実習を経験した学生との自己効力感の差異および実習到達度を比較検討した。自己効力感は、学習意欲や学習能力と密接な関係があり（永谷；2010、山崎ら；2000）、その程度に合わせて教育介入することにより、高めることが可能とされる（眞鍋ら、2007）。

II. 研究目的

本研究は、基礎看護学実習Ⅱにおける変則的な実習で、

学生がどのような学びを得たのか、実習目標の達成度の実態を明らかにする。また、様々な実習形態において臨地実習自己効力感の差異を明らかにし、学生への教育方法の基礎資料を得ることを目的とした。

III. 研究方法

1. 対象

対象は、2021年2月に基礎看護学実習Ⅱを履修した学生とした。

2. 調査期間・調査方法

調査期間は2021年2月～8月で、調査方法は対象者全員に、研究の目的・方法等を口頭および書面にて説明し、同意を得た。質問紙の配布は、実習最終日とし、無記名自記式質問紙で調査した。

3. 調査内容

先行研究（篠原ら、2020）をもとに、研究目的に沿った質問内容に修正し、新たな自記式質問紙を作成した。実習前に病院実習への不安の有無と、その不安の程度について、実習前の状況を想起してもらい回答を求めた。また、実習後に実習目標の達成度については、①患者との関わりを通して、患者を理解し、専門的な援助形成を構築することができたか、②患者に応じた看護過程を展開することができたか、③患者との関わりを通して、基本的な看護技術を修得することができたかの3項目について、それぞれ5件法で回答を得た。さらに、設問に対する理由等を自由記述し

てもらった。

自己効力感は、『臨地実習自己効力感尺度』を用いた(眞鍋ら, 2007)。この尺度は、対象の理解・援助効力感(8項目)、友人との関係性維持効力感(4項目)、指導者との関係性維持効力感(4項目)の3つの因子で構成され、信頼性および妥当性が確認されている。各質問項目について、「かなりよくできると思う:6点」から「全くできないと思う:1点」までの6件法で評価し、高得点ほど自己効力感が高いことを示している。

4. 統計解析

統計解析処理は、Excel 2016および柳井(2020)のエクセル統計ソフトを用いた(有意水準は5%以下)。実習形態を病院実習グループと学内実習グループの2つに区分し、実習形態における病院実習への不安の有無の比較には、フィッシャーの正確確率検定を用いた。実習目標の達成度3項目の得点の比較および臨地実習自己効力感の3因子の得点における群間比較については、Mann-Whitney's U testを用いた。なお、数値は中央値±四分位偏差で表した。

5. 倫理的配慮

対象者には、口頭と書面で研究の目的・方法・情報の守秘義務・学会等での公表および成績評価者に該当しないことなどを説明した。さらに研究への参加は任意であり、無記名自記式質問紙であることを説明した。その後、質問紙と同意書の投函をもって同意を得たものとした。個人が特定されないようBOXを用いて回収した。得られたデータは、匿名性を保護するためにIDを割り当て、研究者のみが取り扱い、研究を遂行した。本研究は、尺度を使用するにあたり、作成者へ連絡し、使用承諾を得るとともに、本学部の研究倫理委員会の承認を得て実施した(承認番号2021M-001)。

6. 用語の定義

臨地実習自己効力感は、眞鍋ら(2007)の先行研究から、「学生は、看護職者が行う実践の中に身を置き、看護職者の立場でケアを行う過程において、看護実践に不可欠な援助的人間関係の形成や専門職者としての役割や責務を果たせそうだと思う気持ちや看護サービスを受ける対象者に向けて看護行為を行う過程で、看護の方法について『実践できそうだ』という自信を示す」ことを指す。

7. 実習の概要

本学部の基礎看護学実習Ⅱは、1人の受け持ち患者に対して看護過程の展開を行う。この展開の中で、専門的な援助関係を形成する能力と看護実践への基礎的能力を身につけ、各領域別実習に向けた基礎的能力の修得を図る。また、学内で修得したコミュニケーション技術、生活援助技術や診療の補助としての看護技術を実際の患者に提供することで、基本的な看護の知識・技術・態度の修得を図ることを目的としている。

IV. 結果

1. 対象者の概要

基礎看護学実習Ⅱを履修した学生62人のうち、有効回答が得られた57人(回収率100%, 有効回答率91.9%)を対象とした。対象者の性別は、女性40人、男性17人であった。

2. 基礎看護学実習Ⅱの実習内容

1) 実習形態

実習形態は、病院実習と学内実習の2つに分かれた。病院実習が46人、学内実習11人であった。

2) 病院実習および学内実習の実習内容

病院実習では、コロナ禍以前と同様に実際に病院施設へ赴き、1人の受け持ち患者に対して看護過程の展開を行った。直接、受け持ち患者とコミュニケーションを取り、診



写真1: 学内実習の様子①



写真2: 学内実習の様子②

療援助としてバイタルサインの測定を、日常生活援助として清拭・足浴・入浴介助・配膳・下膳・口腔ケア・リハビリ

表1 学内実習の実習内容と教職員の役割

<p>1) 患者設定 一般病棟で学生が受け持つことが多い疾患の4事例を設定し、1事例を学生3人で受け持った ・60歳、男性、慢性心不全の患者 ・80歳、女性、慢性腎不全で、透析をしている患者 ・70歳、男性、アルコール性肝硬変の患者 ・65歳、女性、右側変形性膝関節症の患者</p>
<p>2) 模擬カルテの内容 ・実際のカルテに近づくよう、医師記録、検査データ、指示録、経過表、入院時の記録、看護計画、看護記録等を記載 ・入院時から3週間程度の情報で、作成した</p>
<p>3) 学内実習の流れ ・毎朝、朝のミーティングと申し送りの場面の見学から開始し、その後、指導者(教員)へ実習目標と行動計画の発表を行った ・模擬カルテから情報収集をした ・模擬患者へ援助の実施(1週目は環境整備とバイタルサインの測定、2週目は足浴、洗髪、温罨法を実施) ・援助後、指導者(教員)へ報告し、グループメンバーとディスカッションした ・演習以外は、記録の整理と情報共有でカンファレンスを実施した</p>
<p>4) 学内実習で特に工夫したこと ・学内実習1週目は、模擬カルテの情報を当日の朝までの情報のみを公開し、2週目からは、学生が患者の全体像(どのように病状が経過して、退院していくのか等)をイメージできるように、全ての情報を学生に開示した ・申し送りの場面では、夜勤者(教員)から日勤者(教員)へと、模擬カルテに記載されている情報の申し送りを見学させた ・援助は、指導者(教員)の援助の見学から開始し、症状をどのように観察するのか、理解につながるよう実施した ・援助をしていない学生は、観察役とし、援助の良かったところ、もう少し改善する必要があるところを観察した ・援助には、制限時間を設けた(環境整備は10分、バイタルサインの測定とコミュニケーションは合わせて20分、足浴、洗髪、温罨法は各15分) ・症状の観察には、シミュレーター(腹水モデル、浮腫モデル、ラングII等)を活用した ・演習以外は、情報収集や記録整理する時間を確保した</p>
<p>5) 模擬指導者(教員)の役割 ・その日の模擬カルテの情報と実施内容を教員間で共有し、時間管理を行った ・基礎看護学実習室全体を、可能な限り実際の病棟・病室に近づくようにレイアウトした(例:実習室の半分をナースステーションとし、救急カート、モニター、処置台等を配置した。残りの半分を病室とし、男性部屋2床と女性部屋4床とした。病室には、模擬患者の私物、尿器、モニター、点滴スタンド、血糖測定器等、患者の設定にあった物を配置した) ・適宜、学生からの質問への対応や、助言をした</p>
<p>6) 模擬患者役(教員)の役割 ・模擬カルテの内容を読み込み、リアリティある患者を演じた ・援助中は、学生の声掛けや表情、援助方法や手順、学生の反応等を観察した ・援助する学生が交代するごとに、環境や患者の姿勢(仰臥位→端座位、ファウラー位→立位等)に変化をつけ、応用できるように設定した ・援助後に、気づいたこと等を、学生へフィードバックした</p>

表2 病院実習あるいは学内実習を経験した学生の自由記述

病院実習	学内実習
<ul style="list-style-type: none"> ・自身が立案した看護計画を実施できた ・自ら主体的に行動でき、実習目標を達成することができた ・学内で学んだことを直接、患者に実施することができた ・自分自身が成長したと実感がある ・患者との関わりに制限があり、直接、患者に看護技術を実施できなかった ・患者とコミュニケーションを上手く図れなかった ・もっと積極的に行動できれば良かった ・今後の領域実習に向けての課題が見えた ・指導者、患者にも恵まれ、充実した実習を行えた ・患者に直接、「ありがとう」と言ってもらえることは、とても貴重で、実りの多い実習になった ・実習はとてもしんどかったが、楽しかった 	<ul style="list-style-type: none"> ・わからない部分をすぐに調べられる環境のため病態生理の知識を踏まえた上で、援助ができた ・実際の病院実習のような患者の変化をみることができなかった ・実際の病院実習のようなケアによる患者の変化をみたかった ・学内実習でできる範囲で、努力することができた ・自分が成長していることを実感できた ・最初は不安だったが、先生方に模擬患者役や模擬指導者役として協力をしてもらい、充実した実習になった ・先生方の指導で自分の課題を見つけることができた ・学内実習になり、きちんと学べるかと思っていたが、病院実習と近いことができ、十分に学べた ・細かい患者設定を考えており、実際の病室のようにセットされ、看護技術も直接、実施できた

り等の看護技術を実施した。

学内実習では、科目担当教員が作成した模擬患者1人を学生3人で受け持ち、学内実習の担当教員が模擬指導者役と模擬患者役となり、9日間のうち7日間、学内で演習を実施し、看護過程の展開をした(写真1, 写真2)。学内実習の実習内容と教職員の役割を表1に示す。病院実習および学内実習を経験した学生の自由記述を表2に示す。

3. 病院実習グループと学内実習グループにおける病院実習への不安(表3)

実習前の病院実習への不安については、病院実習グループでは、24/46人が不安があると回答し、内訳は、「まあまあ不安だった」者11人、「少し不安だった」者が10人、「ほんの少しだけ不安」だった者2人、「気にならない程度に不安だった」者が1人であった。学内実習グループでは、4/11人が不安があると回答し、内訳は、「少し不安だった」者が2人、「ほんの少しだけ不安だった」者2人のみであった。病院実習グループと学内実習グループにおける実習への不安の有無を比較した結果、出現頻度の有意差は認めら

表3 病院実習への不安による学生の自由記述

病院実習	学内実習
<ul style="list-style-type: none"> ・実習に行きたい気持ちとコロナの怖さ ・感染対策をきちんと行ったとしても、もし患者に感染させた場合を思うと不安 ・新型コロナウイルスの影響で、実習を病院で行うことができるのかという不安 ・コロナ禍で実習が中止にならないか ・コロナ禍で実習は無事に行えるのか ・患者からスムーズに情報収集ができるか ・患者に実際に援助ができるか 	<ul style="list-style-type: none"> ・病院での実習ができるかどうか不安 ・実際の病院での実習環境で、実習ができなくなってしまうかもという不安

表4 病院実習グループと学内実習グループにおける実習目標の達成度

	実習目標の達成度			
	①専門的な援助形成の構築	②患者に応じた看護過程の展開	③基本的な看護技術の修得	有意差
病院実習 (n = 46)	4.0 ± 0.5	4.0 ± 0.0	4.0 ± 0.5	n.s
学内実習 (n = 11)	4.0 ± 0.25	4.0 ± 0.0	5.0 ± 0.5	n.s

*p < 0.05, **p < 0.01 病院実習 VS 学内実習 Mann-Whitney's U test

人数

表5 実習目標の達成度に関する学生の自由記述

項目	病院実習	学内実習
①専門的な援助形成の構築	<p>〈できた点〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・時間が経つにつれてコミュニケーションが図れた ・初日は、頭が真っ白になったが、日々落ち着いて取り組めた <p>〈できなかった点〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・患者との関わりに制限があり、コミュニケーションを取ることが難しかった 	<p>〈できた点〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・患者の気持ちに傾聴し、共感することができた ・実際の病院のような患者に近く、リアルだった ・模擬患者との信頼関係の構築ができたと思う <p>〈できなかった点〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の学習不足により発達課題や健康レベルに応じた関わりが難しかった
②患者に応じた看護過程の展開	<p>〈できた点〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・患者とのコミュニケーションやカルテから情報を取り、展開できた ・患者を第一に優先して、考えることができた <p>〈できなかった点〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・看護過程が難しかった ・看護過程に必要な情報とそうでない情報との区別が難しかった 	<p>〈できた点〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・カルテを見る時間がたくさんあったため、カルテから情報が得やすかった ・よく考えて看護過程の展開をすることができた ・カルテも本物そっくりで作られていて、情報収集をしやすかった <p>〈できなかった点〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・模擬患者役とカルテの中での患者の言動に違いがあった
③基本的な看護技術の修得	<p>〈できた点〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・バイタルサインの測定、清潔援助、体位変換などを実施し、修得できた <p>〈できなかった点〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・援助の見学はできたが、患者との関りに制限があり患者に対して、自らが、実際に援助することができなかった ・看護技術の注意すべき点や必要な声掛けについては理解できたが、実際に実施できなかった ・コロナ禍で、患者との関りに制限があり、できないこともあった 	<p>〈できた点〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ほぼ毎日実習で、バイタルサインの測定をしたためバイタルサインの測定は、特に自信を持って行えると思う ・実施後すぐに教員から評価を受けられ、身についた ・実習2週間ほぼ毎日、基本的な看護技術を行い、修得できたと感じている

れなかった (p=.59, N.S). なお, 病院実習に対する不安の理由を表3に示す.

4. 病院実習グループと学内実習グループにおける実習目標の達成度の差異

実習後における実習目標の達成度の結果を表4に示す. 実習目標の達成度の理由を表5に示す.

実習後における実習目標の達成度の3項目について, 病院実習グループと学内実習グループの達成度の差異を比較した結果, ①患者との関わりを通して, 患者を理解し, 専門的な援助形成を構築することができたか (U=173, p=.17, N.S), ②患者に応じた看護過程を展開することができたか (U=282.5, p=.32, N.S), ③患者との関わりを通して, 基本的な看護技術を修得することができたか (U=318.5, p=.05, N.S) で, いずれの項目も有意差は認められなかった.

5. 病院実習グループと学内実習グループにおける臨地実習自己効力感の差異

病院実習グループと学内実習グループにおける臨地実習自己効力感の得点の比較を表6に示す. 病院実習と学内実習で比較した結果, 対象の理解・援助効力感 (U=223, p=.54, N.S), 友人との関係性維持効力感 (U=221, p=.52, N.S), 指導者との関係性維持効力感 (U=230.5, p=.65, N.S)

となり, いずれの項目も有意差は認められなかった.

6. 性別による臨地実習自己効力感の差異 (表7)

性別による臨地実習自己効力感を比較した結果は, 対象の理解・援助効力感 (U=336, p=.94, N.S), 友人との関係性維持効力感 (U=364, p=.68, N.S), 指導者との関係性維持効力感 (U=334, p=.92, N.S) となり, いずれの項目も有意差は認められなかった.

7. 病院実習への不安の有無による臨地実習自己効力感の差異 (表8)

病院実習への不安の有無による臨地実習自己効力感の得点を, それぞれを比較した結果, 病院実習グループでは, 対象の理解・援助効力感 (U=297, p=.06, N.S), 友人との関係性維持効力感 (U=272, p=.66, N.S), 指導者との関係性維持効力感 (U=259.5, p=.27, N.S), 学内実習グループでは, 対象の理解・援助効力感 (U=6, p=.32, N.S), 友人との関係性維持効力感 (U=7.5, p=.54, N.S), 指導者との関係性維持効力感 (U=5.5, p=.27, N.S) となり, いずれの項目も有意差は認められなかった. しかし, 臨地実習自己効力感の得点をみると, 学内実習グループで不安なしのグループが, 自己効力感の得点が一番低い結果であった.

表6 病院実習グループと学内実習グループにおける臨地実習自己効力感の差異

	臨地実習自己効力感			有意差
	対象の理解・援助効力感	友人との関係性維持効力感	指導者との関係性維持効力感	
病院実習 (n=46)	37.0 ± 2.5	20.0 ± 3.0	20.0 ± 2.5	n.s
学内実習 (n=11)	37.0 ± 3.3	20.0 ± 3.0	20.0 ± 3.3	n.s

*p<0.05, **p<0.01 病院実習 VS 学内実習 Mann-Whitney's U test

表7 性別による臨地実習自己効力感の差異

	臨地実習自己効力感			有意差
	対象の理解・援助効力感	友人との関係性維持効力感	指導者との関係性維持効力感	
女子学生 (n=40)	37.0 ± 2.9	20.0 ± 2.8	20.0 ± 3.0	n.s
男子学生 (n=17)	37.0 ± 2.5	21.0 ± 3.5	20.0 ± 1.5	n.s

*p<0.05, **p<0.01 女子学生 VS 男子学生 Mann-Whitney's U test

表8 病院実習への不安の有無による臨地実習自己効力感の差異

		臨地実習自己効力感			有意差
		対象の理解・援助効力感	友人との関係性維持効力感	指導者との関係性維持効力感	
病院実習 (n=46)	不安あり (n=24)	37.0 ± 2.1	20.1 ± 2.6	20.0 ± 1.7	n.s
	不安なし (n=21)	38.0 ± 3.0	20.0 ± 4.0	20.0 ± 3.0	n.s
学内実習 (n=11)	不安あり (n=4)	37.5 ± 1.1	21.1 ± 1.0	20.1 ± 1.5	n.s
	不安なし (n=5)	31.0 ± 4.0	16.0 ± 3.5	16.0 ± 2.0	n.s

*p<0.05, **p<0.01 病院実習 不安あり VS 不安なし Mann-Whitney's U test
 #p<0.05, ##p<0.01 学内実習 不安あり VS 不安なし Mann-Whitney's U test
 病院実習1人, 学内実習2人が無回答

V. 考察

今回、コロナ禍で実施した基礎看護学実習Ⅱの実習内容が、学生にとってどのような学びを得られたのかを明らかにすることを目的に、臨地実習グループと学内実習グループにおける実習目標の達成度および臨地実習自己効力感の実態を調査した。その結果、病院実習グループにおいては、患者との関わりに制限があったものの、コロナ禍以前と同様に病院施設へ赴き、実際に患者を受け持ち、直接援助を実施したことで、自ら主体的に行動し、実習目標を達成することができていた。一方、学内実習グループは、臨地実習で比較的受け持つことが多い4事例の疾患の模擬カルテを作成し、実習室をリアルな病室環境となるよう設定した。また、教職員が模擬患者役および模擬指導者役になり、可能な限り、リアリティある臨床現場に近づけるように工夫して役に徹した。そのことで学生は病院で実習している感覚で学習でき、学内実習においても実習目標を達成することに繋がり、自己の課題を見出すことができていたと考える。

本学部の実習目標の達成度の3項目について、病院実習グループは、直接、患者とコミュニケーションを図れたこと等から援助関係の形成をスムーズに構築できたものと推察する。また、学生は、個別性のある看護過程を展開し、患者に援助した反応も観察することができ、実習目標を達成することができていたが、患者に応じた看護過程展開の難しさも感じていた。稲山ら(2018)は、病院実習を通して、成功体験を含めた様々な経験の積み重ねが自己効力感を高める動機付けになると指摘している。そのため、実際の患者に、直接、援助を実施し、上手くいった成功体験が達成感のある実習となり、実習目標を達成することに繋がっていたと考える。

一方、学内実習グループでは、ある程度のスケジュールが確立した中での実習であり、情報収集の時間が十分に確保できたことや、教員からのフィードバックが得やすい環境にあることで、看護技術を獲得できたという自信に繋がり、実習目標を達成することができていたと考える。高畑ら(2021)は、学内実習では、教員が個々の学生と関わる時間が長く、学生の学習状況や考えを聞く時間が十分に取れることで、学生の努力や成果を言語として伝えることができ、自己効力感を高めたと指摘している。本研究においても同様に、学内実習は、学生と十分に関わる時間が確保でき、そのことが今回の結果に影響していると推察された。

このように、病院実習グループも学内実習グループも実習目標を達成することができていたが、病院実習グループでは、コロナ禍で患者との関わりに制限があることにより、基本的な看護技術の修得が難しい場面もあったため、実習指導者と共に連携し、看護技術の修得に向けての調整が課

題であると思われる。一方、学内実習グループでは、臨地のような複雑な情報関連図にはならないことや、模擬カルテと模擬患者の整合性等が課題となった。

本研究では、眞鍋ら(2007)が作成した臨地実習自己効力感尺度を使用し、病院実習グループと学内実習グループの自己効力感の得点を比較した結果、有意差は認められなかった。このことは、学内実習グループが病院実習グループと同様に、学生が自身にできることを考え、必要に応じて援助行動をできたものと考ええる。また、病院実習グループは、目の前の患者に対して、自ら考えた看護計画に沿った看護援助を実践したことで、患者の実際の反応を身近で実感できた結果、自己効力感を高めることに繋がったと考えられ、眞鍋ら(2007)の、病院実習での経験が自己効力感を高めるとの報告と一致していた。そのため、教員は、コロナ禍においてもできる限り、現地に赴き、実践の中に身を置くことができる実習が可能になるように、病院施設と調整することや、学生の実習での経験から、実践できそうな自信の獲得ができるよう、実習指導者と連携していくことが、自己効力感を高めるために重要であると推察する。一方、学内実習グループは、模擬患者での看護援助の実施であるため、リアリティある患者の反応までには至らなかったことが、今回の結果に影響していると考えられる。よって、学内実習は、リアリティある経験を如何に学生へ提供できるかが肝要であると考ええる。

性別の違いによる臨地実習自己効力感の得点は、眞鍋ら(2007)の研究では、友人との関係性維持効力感に性別による差が認められ、女子学生の方が男子学生よりも友人との親密な関係性を望むことを指摘していたが、本研究では、有意な差が認められなかった。

病院実習への不安の有無による病院実習自己効力感の得点については、病院実習グループも学内実習グループも有意差は認められなかった。しかし、それぞれの項目の得点を見ると、学内実習グループの中でも不安がないと回答した者の得点が一番低いという結果となり、学内実習グループでは、自己効力感を高めることができていなかった。これは、学内実習では、模擬患者と模擬指導者は普段から接する教職員であり、臨地実習のようなリアリティある緊張感を維持できなかった可能性があると考えられる。松本ら(2020)も学内実習は、学内の慣れた環境と教員の元のものとなるため、緊張感の欠如ではないかと思われる場面もあったことを指摘している。このことは、先行研究と同様な課題が残った。

病院実習は、臨地で、緊張感を持ち、実践の中に身を置いている。その実践の中で起こる事象を理解するために、既習してきた看護の知識・技術・態度を統合し、看護師から指導を受けることでリアルな学びを身につけていく。この経験の中で学生は、患者との援助関係の形成や看護過程

の展開への困難感や達成感を感じながら、実習目標を達成していくと考える。よって、学内実習では、既習してきた看護の知識・技術・態度を統合するだけでなく、よりリアルティある緊張感を持ちながら実習ができる実習内容の検討も必要であると考え。今後、模擬患者役を実際の闘病体験をされた患者ボランティアの導入の必要性についても検討したい。さらに、自己効力感がどのように変化していくのか、領域別実習前後、統合実習前後と経時的に比較検討しながら、様々な実習形態による教育支援をより明確にしていくことが喫緊の課題である。

VI. 結論

本研究では、新型コロナウイルスの感染拡大を受け、病院実習と学内実習それぞれの異なる形態で実施した基礎看護学実習Ⅱの実習内容が学生にとって、どのような学びとなったか、実習目標の達成度について報告した。学内実習では、教職員による模擬患者に援助することで看護過程の展開および看護技術の提供などを実施したが、病院実習と学内実習の実習形態の違いによる実習目標達成度と臨地実習自己効力感に有意差は認められなかった。

したがって、それぞれの実習形態においても実習目標は、ある程度の達成はできたと考えられるが、臨地実習での経験や学びに近づけるような患者の設定条件の検討、臨地実習自己効力感の向上に向けた看護ケアの実践と評価について引き続き、検討が必要であることが示唆された。

文 献

- Bandura, A. (1977) : Self-efficacy. Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84, 191-215.
- 稲山明美, 伊東美佐江, 松本啓子, 山本加奈子 (2018) : 看護学生の効果的な臨地実習へ向けた自己効力感に関する検討, *川崎医療福祉学会誌*, 28, 1, 37-46.
- 眞鍋えみ子, 笹川寿美, 松田かおり, 北島謙吾, 園田悦代, 種池礼子, 上野範子 (2007) : 看護学生の臨地実習自己効力感尺度の開発とその信頼性・妥当性の検討, *日本看護研究学会誌*, 30 (2), 43-53.
- 松本晃子, 西上あゆみ, 長井雅代, 宮岡裕香, 賈玉婷, 中野玲子 (2020) : 2020年度看護学科のコロナ禍における2年次基礎看護学実習実践報告, *藍野大学紀要*, 33, 43-51.
- 永谷実穂 (2010) : 臨地実習における自己効力感の変化に関する研究, *静岡県立短期大学部研究紀要*, 24, 1-12.
- 篠原幸恵, 讃井真理, 中島紀子, 河野保子, 羽藤典子, 永江真弓 (2020), 看護系大学のコロナ禍における基礎看護学実習Ⅰの学内実習と教育の質確保に関する検討, *健康生活と看護学研究*3, 14-19.
- 高畑正子, 日浅友裕, 奥村玲子 : コロナ禍により思考過程に重点を置いた学内実習を履修した看護学生の自己効力感, *日本国際情報学会誌*, *国際情報研究*, 18 (1), 30-38.
- 柳井久江 (2020) : 4steps エクセル統計, 第4版, 265-268, オーエムエス.
- 山崎章恵, 百瀬由美子, 阪口しげ子 (2000) : 看護学生の臨地実習前後における自己効力感の変化と影響要因, *信州大学医療技術短期大学紀要*, 26, 25-34.

【付記】 本研究に利益相反は存在しない。

A Study of Basic Nursing Practicum II during the COVID-19 Pandemic — Differences in the acquisition of self-efficacy with different modes of clinical practice —

Abstract: The purpose of this study was to clarify what students learned from the Basic Nursing Practicum II conducted during the COVID-19 Pandemic, and the achievement of the student training goals, and sense of self-efficacy

The study group consisted of 57 second-year students who consented to participate in the study. Survey items included anxiety about institutions that accept clinical training students, achievement of training goals, and self-efficacy in the clinical training.

For this study students were involved in a variety of training modes during the COVID-19 Pandemic. In the clinical training, the students were able to achieve their training goals and identify their individual difficulties by directly being in charge of patients and actually helping the patients. In the on-campus training, the students were able to achieve their training goals by providing direct assistance to patients simulated by faculty members in the role of a simulated instructor. However, not being able to reproduce realistic patient reactions as in actual practice remained a challenge.

The findings suggest the importance of assisting the students to improve self-efficacy in collaboration with training supervisors accommodating the various modes of training conducted during the COVID-19.

Keywords: Nursing Student , Corona Disaster , Basic Nursing Practice II , Self-efficacy , Training Format